

退職記念講演会（講演抄録）

# 19世紀前半におけるドイツの 哲学・文化革命をめぐって

——ヘーゲル・ベートーヴェン・マルクス

About the Revolution of Philosophy & Culture,  
in the early 19th Century Germany's

石 井 伸 男 教授

私は学部・大学院時代を通じて西洋哲学を専攻し、とくに近代ドイツ哲学を専門に勉強してきた。今回は自分の関心に引きつけてではあるが、いくらか広いテーマで話したい。

まず、なぜ西洋近代哲学はドイツに代表されるようになったか？という疑問がある。

英・独・仏は昔も今も欧州の主要民族であるが、18世紀には先進国である英・仏と「みじめな」後進国ドイツとの対比が明らかだった。ドイツは国土統一もできず、百を超える領邦国家に分裂したままであった。「ドイツ人ほど支離滅裂な国民は思い浮かべることができない」（ヘルダーリン）。これは知識層の嘆きを代弁する声であろう。しかし、経済（英）にも政治（仏）にも活路が見いだせない、後進性の痛切な自覚が反発力となり、哲学や文化領域での変革エネルギーを生み出したとする説（山崎正一、古在由重ら）があり、私もこれは大要当たっていると思う。

ゲーテ（1749–1832）とシラー（1759–1805）が、18世紀末に文学の「疾風怒濤」時代を創った。またカント（1724–1804）とフィヒテ（1762–1814）らが、ドイツ観念論哲学を築いた。これらにはなによりフランス革命の影響が色濃い。「カント哲学はフランス革命のドイツ的理論だ」（マルクス「歴史法学派の哲学的宣言」1842）との評言にあるように、革命精神は内面化されたのである。

## 1. 真理は全体である？

ヘーゲル（1770–1831）はドイツ観念論哲学の完成者であり、主書『精神現象学』1807、『大論理学』1812/16をふくむ4つの著作を著した。青年期にフランス革命に共鳴し、ドイツでの同様な革命の実現を期してジャーナリストになるが、挫折。哲学理論完成へと向かいこれを成就した。晩年にプロイセン政府に招かれてベルリン大学教授に就任し、国家哲学者と見なされる。

ベートーヴェン（1770–1827）はヘーゲルと同年生まれの、古典主義音楽の最高峰を築いた人であり、『交響曲第三番』1804、『交響曲第五番』1808他数々の個性的名曲を作曲した。

私はかなり前から、ヘーゲルとベートーヴェンには本質的同一性があると感じていた。

私としては A『精神現象学』と A'『交響曲 3 番』、また B『大論理学』と B'『交響曲第 5 番』が、それぞれ深く親近性をもつと見る。——A は人類の精神史を総括した書で、啓蒙とその帰結としての仏革命を位置づけている。A' は叙事的で広大な空間性を感じさせる。しかもナポレオンに捧げる予定だった。B は論理的諸範疇が自己運動し必然的に展開する書である。「具体物を思い浮かべてはならない」という。B' は指揮者金聖響によれば「『第五』にはおかしい部分、いらぬ部分が一ヶ所も存在しない。満点の作品なので、これ以上に完成された作品など誰にも生み出すことができない」必然的に展開する曲である。

ところが数年前、現代の哲学者アドルノが既にこの問題を深く論じているのを知った。彼は「ベートーヴェンの音楽はヘーゲル哲学そのものである。しかし同時にこの音楽はヘーゲル哲学以上に真実でもある。この音楽には社会の自己再生産は、同一的なものとしては十分でないこと、それどころか虚偽でもあるという信条が込められている」（『ベートーヴェン 音楽の哲学』遺稿／邦訳・作品社、1997）と述べている。

ヘーゲルは事物とりわけ社会の、否定を媒介とした発展（弁証法）を主張したが、しかし政治的国家（プロイセン）と思弁的哲学体系において、真理は完結すると見なした。つまり「真理は全体である」。他方中期ベートーヴェンは、ヘーゲルと同様に音楽の世界でロマン派的要素をふくむ古典主義を完成させたが、同時に後期弦楽四重奏曲やピアノソナタなどの晩年の作品群ではこれを破壊しはじめる。論理的同一性（美）の建設と同時にその否定に乗り出すのがベートーヴェンなのである。あたかも「全体は非真理だ」（アドルノ）と言いはじめるかのよう。

## 2. 歴史は論理にしたがうか？

マルクス（1818—1883）はヘーゲルの直接の弟子ではないが、その哲学に深く影響された人である。青年期にその哲学から脱却し、『資本論』にいたる批判的経済学を樹立し、同時に革命家として歩んだ。2 人の理論がどこで違うかを、ここでは歴史と論理の关系到絞って述べたい。

ヘーゲル哲学は「歴史の論理化」と「論理の歴史化」を特質としている。——彼は本質的に社会哲学者であり、人類史を精神史として総括した。近代の意義を A・スミスから学びこれを「市民社会」として押さえた。論理学はそうした精神史を論理化したものであり、実は現実の表象を下敷きにしている。しかし次に一度できあがった論理は、現実に対して無批判に持ち込まれる。つまり論理主義になる。プロイセン国家は最高の自由を実現したのだから、もはや歴史には何もやるものが残っていないのである（コジェーブが言う「ヘーゲルにおける歴史の終焉」）。

マルクスはこれに対して「固有の対象の固有の論理を」と主張する。思弁を排した現実の分析をおこない、その総括にあたって弁証法の論理を生かそうとした。『資本論』ではまず「商品の巨大な集積」である資本制社会の全体が表象されている。「商品」が端緒の基本形態であり、そこから

貨幣また資本へと展開されるが、この進行は単純なものから複雑な全体へと進む論理的歩みであり、それは実際の歴史の歩みとは一致しない。ヘーゲルの言うような歴史と論理の平行関係は存在しない。資本は自己運動し増殖を重ねるが、同時に当初から存在する矛盾を拡大し、やがてその体制を維持できなくなるとマルクスは見た。

哲学は未来を語ることができるか？

ヘーゲルは「ミネルバの梟は夕闇に飛び立つ」（『法哲学』序文）と述べて、学問は世界が出来上がった後にはじめて成立するとした。青年マルクスは「ガリアの雄鶏が関の声を上げる」ように、ドイツ復活の日を告げ知らせる「批判哲学」が必要だと訴えた。だが、当のマルクスはやがて「哲学」という言葉そのものを捨てるようになる。我々はある未来の必然的な到来を語るべきではなくて、敢えて欲求と希望にとどまるべきではないか。

平成20年1月30日 於 附属図書館ホール

